

銭稻孫訳『源氏物語』の特徴について（上）

田 中 幹 子
鄭 寅 瓏

はじめに

完訳された中国訳『源氏物語』は、管見の限り十二種ある。そのうち十種は豊子愷訳の影響下にある^{*1}。豊訳以前の訳としては最初に翻訳された銭訳、最初に出版された林訳がある。豊訳の特徴を明らかにするために林文月訳と銭稻孫訳とを比較して分析考察した結果、豊訳の原文解釈にいくつか問題点があることがわかった。同時に銭訳の原文理解がいかに優れているかがわかった。銭訳への評価としては張龍妹氏が日本語の語順をそのまま生かした逐語訳的な文体であると指摘されている^{*4}。しかし銭訳の質の高さはこの評価では不十分である。本稿は銭訳『源氏物語』の魅力の分析とともに入手困難である銭訳『源氏物語』の原文を紹介することを目的としたものである。

銭稻孫訳は50年代の際に新中国のアジア文学を紹介するブームに乗り、雑誌『訳文』（人民文学出版社・1957年8月号）で『源氏物語』の紹介と「桐壺」巻を発表した。これが『源氏物語』原文の初中国語訳である。しかし翻訳のスピードが遅いため人民文学出版社との契約は途中で打ち切られた。その後、人民文学出版社は豊子愷氏に翻訳の依頼をした。銭稻孫氏は1933年には『源氏物語』の翻訳の作業に取り掛かり三年余りをかけ全体の五分の一まで訳がすすめられていた。しかし銭稻孫氏は文化大革命の中で亡くなり残された原稿も四散^{*5}してしまった。

銭氏は日本占領下に北京大学秘書長・文学院院长に就いていたため、国民党政府の漢奸裁判で下獄し、人民共和国になってもその汚名のまま活動が制限された。そして文化大革命の最中に亡くなったため、現在ほとんど忘れ去られた存在である。しかし残された訳文からは、銭氏がいかに日本古典文学に造詣が深かったか、中国人に理解させるためにどんなに腐心されたかが、十分うかが

える。本稿で少しでも銭氏の功績を明らかにしたい。

紙面の都合上、銭訳を二回に分けて掲載する。原文の区切りは銭訳に従った。今回は銭訳の五章分を紹介した。また鄭寅瓏氏によって銭訳をさらに日本語に翻訳した。その際、銭訳が主要人物の呼称を中国の宮廷における呼称に置き換えているという張龍妹氏の指摘に従い呼称の訳は中国語のままに訳している。ただ読みの不便を考慮し中国語の呼称の隣に括弧を付けて、日本語の呼称も入れた。また銭氏は時折、主語などを省略するため、省略した部分も括弧の中に補った。

形式は、銭訳の一段落ごとに原文（新日本古典文学全集本所載原文）・銭訳・銭訳の日本語訳・銭訳の特徴に分け、銭訳の特徴の欄に稿者の分析を箇条書き形式でコメントした。

（一段）

原文

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれてときめきたまふありけり。はじめより我はと思ひあがりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそれみたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。朝夕の宮仕えにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負うつもりにやありけん、いとおつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人の譏りをもえ憚らせたまはず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部、上人などもあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れあしかりかれと、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。

父の大納言はなくなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何ごとの儀式をもてなしたまひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、事ある時は、なほ寄り拠りどころなく心細げなり。

銭稻孫訳

是哪一朝代来，女御更衣好多位中间，有一位并非十分了不得身分，却出众走时的。从开初就自负不凡的几位，都道刺眼儿，褒贬妒忌于她。同品级的，再次级一些的更衣们呢，愈加不得安停了。连个朝晚的承值，都要惹人多心，敢是瞥气瞥的，一径儿憔悴下来，怯弱得时常去娘家，偏生地皇上越发看着可怜不过，也不怕人讥弹，竟是创开了新例的宠待。殿上公卿们都侧目起来，道是好不耀眼的隆宠！那唐土也就为的这等事儿上，把个天下都乱坏了的，渐渐不是味儿，落做了天下人担愁的话柄，没来由的烦恼正多，只奈何不得忝恩的深厚，不好不混着敷衍。父亲大纳言已经亡故，母堂夫人么，原是有来历的旧家人，百般礼数都张罗得不比双亲俱在、当代荣华人家的差了，只是缺个出面的着力主子，一朝有起事来，还觉单薄没处仗靠。

銭訳の日本語訳

どの時代であったか、大勢の女御更衣の中で大变身分が高いとはいえないお方が、抜きん出て時めいていた。初めから自負していたお方々は、この方を目に余ると思ひ、誇ったり嫉妬したりする。同じ階級、またはもっと下の更衣たちは、ますます気持がおさまらない。朝晩の宮仕えまでも、人の心を搔き立て、気が塞いだためだったろうが、やつれていって、常に実家に戻るほど弱くなってしまい、それにも関らず皇上(帝)はいよいよたまらなく気の毒だと思ひ、他人の非難も恐れずに、前例のない寵愛を始めた。殿上人、公卿たちは目を測めつつ、まばゆい寵愛だと思つた。唐土もこのような事のため、天下も乱れ、しだいに悪くなっていき、と天下の人々が憂える話題になり、とにかく悩むことがとても多いけれども、かたじけない寵愛はどうしようもないので、宮中の生活をやりすごさなくてはいけない。父の大納言はなくなっている。母方は、もともと旧家の出身で、全ての礼節の用意は、両親が揃ひ現在世に時めき栄える方にも劣らずおこなっているが、ただ表に立ってもらふ頼りがある長がないので何か事があつたら、心細くて頼れるあてがないと思つている。

銭訳の特徴

1・銭訳の最も優れた点は古語を出来うる限り正確に伝えている点である。たとえば「めざましきものにおとしめそねみたまふ」の「めざまし」の訳を豊訳では「如今看见这更衣走了红运，便诽谤她，妒忌她。(今この更衣の幸運を見て、彼女を誇ったり嫉妬したりする。)」、林訳では「对她自是不怀好感，既轻蔑，又嫉妒。(もちろんその更衣に好感を持たなくて、彼女を軽蔑したり嫉

妬したりする。」と、ともに「更衣の幸運をみて」「更衣に好感を持たなくて」と意識しているのに対し、銭訳は「都道刺眼儿，褒贬妒忌于她。（目障りだと思ひ、善し悪しを論評したり嫉妬したりする）」と訳した。「刺眼儿」は目障りでまぶしいとの意であり、「めざまし」に最も近い訳である。

2・日本人の感覚を中国人に理解させるための意識がされている。原文では「もの心細げに里がちなるを、いよいよあかすあはれになるものに思ほして」と、更衣が周囲からの圧迫で心細く里がちになることで、ますます哀れに愛おしく思い寵愛が深まるとなっている。これは日本的にはごく自然である。しかし中国の朝廷の場合は、帝の前から去るとただちに帝の寵愛が消えると考え、里によく戻るにもかかわらず寵愛が深まると逆接で表現することで中国人に理解しやすいように訳している。

3・「唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけれと、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆくに」の部分、銭訳は「楊貴妃」という言葉を意図的に省略している。豊訳では「唐朝就为了有此等事，弄得天下大乱。」这消息渐渐传遍全国，民间怨声载道，认为此乃十分可忧之事，将来难免闯出杨贵妃那样的滔天大祸来呢。（「唐朝でも、こういうことで、天下に大きい乱れを起こした」と議論した。この噂がだんだん全国に広がり、民間でも大きな不満があり、非常に憂慮すべきことだと思ひ、将来は楊貴妃のような大きい災いを招くかもしれないと心配している。）という国の状況は、唐朝の安史の乱に連想しやすい訳であること以前指摘した⁹。ここは民衆の蜂起ではなく宮廷内の貴族の権力闘争である。中国の読者にとって楊貴妃は安氏の乱を招いたまがまがしい女という印象が強く、それを更衣の寵愛の喩えにすると更衣が国の騒乱を招く野心的な女性の如きイメージになってしまうおそれがある。ちなみに林訳では「有人甚至于杞人憂天的拿唐朝變亂的不吉利的事實來相比，又舉出唐玄宗因迷戀楊貴妃，險些兒亡國的例子來議論着。（さらには杞人のように無用の心配をかけて、唐の変乱という不吉な事実と比べる。また玄宗皇帝が楊貴妃に夢中になったため、もう少しで国を滅ぼす例を挙げて議論している。）」となっており楊貴妃の騒乱とは次元が違ふとことわりをいれている。銭訳は「那唐土也就为的这等事儿上，把个天下都乱坏了的，渐渐不是味儿，落做了天下人担愁的话柄，没来由的烦恼正多，（唐土もこのような事のため、天下も乱れ、しだいに正常に外れ、天下の人々が憂える話題になり、知らずに悩みが多いけれども）と張龍

妹氏も指摘しているように銭訳は、原文の句点まで一致させているほど極めて原文を尊重しているにも関わらず、楊貴妃という言葉を訳していないのである^{*8}。中国読者の常識的楊貴妃像を考え、更衣が権力を志向したたかな女性というイメージになることを恐れ、意図的に省略したものであろう。

4・更衣の母は「いにしへの人のよしあるにて」だから教養は十分であるため、両親が揃っている「世のおぼえはなやかなる御方々（世の中の評判が高い方々）にも劣らず、何ごとの儀式をもてなしたまひけれど」ということが可能だったがという部分。豊訳「看见人家女儿双亲俱全，尊容富厚，就巴望自己女儿不落人后，（他人のお娘が両親を揃い、栄華と富貴に浴しているのを見ると、自分の娘も劣らないと望み）」や林訳「她看到雙親健在的別人家小姐們都過着那種氣派豪華的生活，決心不讓自己的女兒輸給別人（両親が揃いた他家のお嬢さんたちが立派で贅沢な生活を暮らしてのを見ると、自分の娘も劣らないようと決心して）」と両訳ともに「世のおぼえ」を「尊容富厚」（豊訳）、「人家小姐們都過着那種氣派豪華的生活」（林訳）と富に浴していると訳し、更衣の母がそのような富を望んでいると解釈している。娘によって栄耀栄華を望む野心的な母となってしまう。対して銭訳は「百般礼数都張罗得不比双亲俱在、当代荣华人家的差了（全ての礼節の用意は両親が揃い現在世に時めき栄える方にも劣らず、ただ後見がないので）」と更衣の実家が格式ある家柄であることと、母一人で健気に世話しているあわれさを表現している。銭氏が貴族社会において有職故実が重要視されていたことをよく理解していることがわかる。

（二段）

原文

前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなり児の御容貌なり。一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづききこゆけど、この御にほひには並びたまふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。

はじめよりおしなべての上宮仕したまふべき際にはあらざりき。おぼえいとやむことなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはっせたまふあまりに、さる

べき御遊びのをりをり、何ごろにもゆゑあることのふしぶしには、まづ参上らせたまふ、ある時には、大殿籠りすぐしてやがてさぶらはせたまひなど、あながちに御前さらずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この皇子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この皇子のみたまふべきなめりと、一の皇子の女御は思し疑へり。人よりさきに参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めをのみぞなほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。かしこき御陰をば頼みきこえながら、おとしめ疵を求めたまふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞしたまふ。

御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて隙なき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふもげにことわりと見えたり。参上りたまふにも、あまりうちきるのをりをりは、打橋、渡殿のここかしこの道にあやしきわざをしつつ、御送り迎へのひとの衣の裾たへがたくまさあなきこともあり、また、ある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかなた心を合はせてはしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて、数知らず苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるをいとどあわれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司をほかに移させたまひて、上局に賜す。その恨みましてやらむ方なし。

この皇子三つになりたまふ年、御袴着のこと、一の宮の奉りしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くしていみじうせさせたまふ。それにつけても世の譏りのみ多かれど、この皇子のおよすけもておはする御容貌心ばへありがたくめづらしきまで見えたまふを、えそねみあへたまはず。ものの心知りたまふ人は、かかる人も世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで目をおどろかしたまふ。

錢稻孫訳

多管前世的恩情也不浅，早诞生了一位人间少有、清秀如玉的皇子。皇上计朝数日地等待已久，催着叫抱进来〔1〕一看，好个清奇的孩儿相貌。一皇子是右大臣家的女御所生，望重国中，自是无疑的储君，可是比到这一位的容光来，是再也比不上的，因此皇上心里也就是一般儿的慈爱，却把这一位呢，当做自家私宝，珍惜无限。生母本来就不是平常值侍之流。品望高贵，原是位尊体崇的，无奈官家一味胡缠之余，但凡游乐时节，不管有个什么事儿，首先总要传她上去。

有时寝殿晏起，就此留住，直不许离开御前，自然也就显得轻易了，自从生了皇子以后，官家也加意持重起来，以致一皇子那女御倒起了疑心，莫非东宫都，一个不好，会叫这位皇子去住了。其实入官在人之先，恩宠并不寻常。况且已有子女，所以独是这位的微言，皇上还是不好意思不听的。这边虽说仗的荫庇。却不少吹毛求疵的人，自家身子又软弱，意怯心烦，也且自多愁。宫院是桐壶（2）。不断地御前上下，必得路过好几位的门前，人家操心，确也难怪。有时上殿太频繁，跨板（3）、过廊（4）、这儿那儿路上，会见些怪事儿，做弄得接送宫娥的衣裾都沾污得不可以堪。还有时，关进在穿堂（5）里，两头约齐地锁上了门，窘事儿真不少。遇事只添来数不清的为难，十分愁苦，皇上看着可怜，叫后凉殿（6）原有更衣们的值事房迁往别处，腾给她做值殿休憩之处。这一层仇怨，又是没个了期的。皇子三岁那年，着袴典礼，不劣于一皇子那时，提尽了内藏寮（7）、纳殿（8）里的上料，办得异常隆盛。这也直多闲话的，及至见到这位皇子长成得容貌性情那么难得，也就没得说的。懂点事儿的，都傻瞪着眼惊叹：人世里竟有这般人物！

（1）那时制度，在娘家做月子。

（2）五宫院之一，官名“淑景舍”，在后宫东北隅，种有梧桐树。

（3）跨在两殿廊间的架板。

（4）两殿间的过廊宽厅。

（5）穿过殿中的街堂。

（6）皇帝坐起的清凉殿后殿，内宫西南隅。

（7）职司金银珠宝；海外珍品；贡进的织造御物。

（8）殿内库房，收藏累代御物。

錢訳の日本語訳

たぶん前世の恩情が浅くないからだろう。もう世にめづらしい玉石のように清らかな皇子を産んだ。皇上（帝）は日数を数えて待ち遠しく、（宮中に）抱いて来ること（1）を催促して見たら、なんと清らかな子供の顔立ちのことか。一の皇子は右大臣家の女御に生まれ、世に評判が高く、当たり前の東宮であるが、この方の顔立ちと比べると、比べるべくもないので、帝はごく一通りに可愛がっている一方、この方を、個人的な秘宝として、可愛がること極まらない。生母はもともと日常の世話をするような使用人ではない。品と名声も高く、もともとしっかりとした雰囲気の方であったが、如何せん官家（帝）がひたすらまとわりつかせ、遊びのたびに、何にせよ、まず彼女を呼ぶ。時には

遅く起き、そのまま泊らせ、目の前から離れさせず、自然と軽く見られて、皇子が生まれて以来、官家（帝）も特に気をつけて慎重になってきて、一の皇子の（母）女御も疑い始め、もしかしたら東宮の地位はこの皇子にとられるかもしれないと思ってきた。（女御は）実は人より前に入内して、恩寵が特別であり、子女も生んだので帝はこの方の意見だけは無視するのに気が引ける。こちらは御庇護が頼りだが、あら探しをする人が少なくないし、自分の体も弱く、びくびくしたり鬱々したりして、悩みが多い。局は桐壺である（2）。御前に行きつ戻りつして、何人のお方の部屋の前に経らなければならないので、彼らに気を配られたのも、当たり前なことだ。時には上がることが頻繁だったため、打橋（3）、渡り廊下（4）やあちこちの道には怪しいことがあり、迎える宮娥（女房）たちの裾が非常にきたなくなるまでいたずらされたこともある。また、馬道（5）に閉じ込められて、両端もちょうど鍵をかけられたこともあり、迷惑なことが本当に少なくない。ことに突き当たると、数え切れない面倒くさいことが付いてきて、非常に苦しんでいた。皇上（帝）はかわいそうだと思い、もともと後涼殿（6）にある更衣たちの宿直室を別の所に移して、彼女の宮仕えの休憩室にした。この恨みは、また限りがない。皇子が三歳の年、袴着の儀式は、一の皇子の時よりも劣らない。内蔵寮（7）、納殿（8）の高級なものをすべて取り出して、非常に盛大に行われた。これも皆にいろいろ言われ、（しかし）この皇子の成長するにつれ容貌と人柄がこのように珍しいと見るに至って、文句も消えてしまった。多少道理の通じる人なら、目を見張って「この世にはこんな人もいることだ」と呆然とした。

- （1）当時の制度は実家で生産後の休養をする。
- （2）五宮院の一つ、宮名は「淑景舎」、後宮の東北の隅、桐の木が植えられる。
- （3）二つの宮殿の間の板。
- （4）両殿の間の廊下の寛庁。
- （5）殿中を通す御堂である。
- （6）帝が暮らしてる清涼殿の後殿、内裏の西南の隅にある
- （7）役割は金銀や宝石、海外の貴重な品物、外国から献上した職造御物を管理する。
- （8）殿内の倉庫、前からの御物を集める。

銭記の特徴

1・原文「世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。」の完了

「ぬ」を強調し「だいぶ前に（早）」と訳している。これは、中国読者に皇子誕生という大問題がおきたのは、今よりもっと前からだと意識させているためと考えられる。

2・原文「ある時には、大殿籠りすぐしてやがてさぶらはせたまひなど」の「ある時」を「時々は（有時）」と度々ある事になっている。頻度をあげることによって常軌を逸した帝の更衣への寵愛ぶりを強調したと思われる。

3・原文「御局は桐壺なり。あまたの御方々を過ぎさせたまひて隙なき御前渡りに」の部分、帝が暇なく更衣の許に行くことだが、銭訳「不断地御前上下」だと更衣が「御前に上り下りして」と夜の宿居に頻繁によばれたことを想像させる。夜のお召しが女君たちの争いの根本なので、銭氏は意図的に昼の御前渡りを夜のお召しに変えたとも考えられる。

（三段）

原文

その年の夏、御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、常のあつしさになりたまへれば、御目馴れて、帝「なほしばしこころみよ」とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏してまかでさせたまつりたまふ。かかるをりにも、あるまじき恥もこそと心づかひして、皇子をばとどめたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。

限りあれば、さのみもえとどめさせたまはず、御覧じたに送らぬおぼつかなきを言ふ方なく思ぼさる。いとほひやかにうつくしげなる人の、いたう面瘦せて、いとわはれものを思ひしみながら、言に出でも聞こえやらず、あるかなきかに消え入りつつものしまふを御覧ずるに、来し方行く末思しめされず、よろづのことを泣く泣く契りのたまはずれど、御答へもえ聞こえたまはず、まみなどもいとたゆげにて、いとどなよなよとわれかの気色にて臥したれば、いかさまにと思しめしまどはる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひてさらにゆるさせたまはず。帝「限りあらむ道にも後先立たじと契らせたまひけるを。さりともうち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見たてまつりて、

「かぎりとして別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり

いとかく思いたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむと思しめすに、「今日はずむべき祈祷ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。

御胸のみつとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行きかふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまあはせつるを、「夜半うち過ぐるほどになむ、絶えはてたまひぬる」とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こしめす御心まどひ、何ごとも思しめしわかれず、籠りおはします。

皇子は、かくてもいと御覧ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、まかでたまひなむとす。何ごとかあらむとも思したらず、さぶらふ人々の泣きまどひ、上も御涙の隙なく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを。よろしきことにだにかかる別れの悲しからぬはなきわざなるを、ましてあはれに言ふかひなし。

錢稻孫訳

那年夏天，贵人（1）自觉病情恍惚，要请假出宫，直不蒙准许。年来习常沉重，御眼里见惯了，总是说再看看情形，哪知日重一日，才五六天，就病得不像，太君进来哭奏，方许出去。还怕这时候，再落个不好看，留下皇子，悄悄退出。事到其间，宫家也没法苦留，但觉得送一送都办不到，说不出的伤心。那么个风韵佳丽人儿，消瘦得这般，一息恹恹，似有若无的，心里有着话，一句也说不出来，焦急得皇上不思前后，流着御泪百般体恤温存，还是不闻一声答应。眉弛目懈，软疲绵如痴如梦地躺着，看得又没了主意。宜旨特传辇车（2），回进来却又不叫动了。只说：“盟誓之言，大限到时也愿无先后的，料你也不好破弃而去吧”，妇人听到悚惶不迭，气息恹恹地奏道：

“临到歧途悲欲绝，
不胜薄命恋残生。”

早知……如此……”，话没说完，已自气乏神疲了，皇上转念，索性就这么着，好歹也看个究竟罢，可是外面催着：“今天开坛祈祷，执事人等都已到齐，即晚就开……”，勉强强，放了出去。从此皇上胸臆填塞，一眼也不睡，等不得天明。差人出去还没回来，惦念直没个消停，使者一到就听见哭闹，说是刚过得半夜，就咽了气，嗒丧着返回奏。皇上一听伤悼，百事都管不得了，独自守在殿里。皇子么，原是怎么也不肯放开的，无奈这等时分没个在宫之例，就得出

去。还不懂得有什么事呢，只看着侍女们个个哭坏，皇上也不断淌着眼泪，直似疑怪，就在平时，离别总没有不伤心的，何况此时，悲伤更不用说了。

（1）原文“御息所”，称呼更衣。

（2）宫内手挽车，唯有太子、亲王、大臣、僧正，方许乘坐。

銭訳の日本語訳

この年の夏、貴人（更衣）（1）は自分が病気のように感じて、休みを取って宮中から出ようと思ったが、まったく（帝に）許されなかった。年頃よく具合が悪くなり、（帝は）もう見慣なってきたので、いつももう少し様子を見ようと言っていた。しかし（病は）日々積み重なって、五六日たつと、もう見るに耐えない様子になった。太君（北の君）が泣きながら上奏してきたので、ようやく（宮中から）退出することができた。こんな時にも、恥をかかされみともなくなることを心配して、皇子を残して、こっそり出てしまった。きまりがあることなので、こんな状況になって官家も無理に引きとめられなかった。しかし見送ることもできないのは、言葉に表せないぐらいつらいと思っていた。あんな優雅で美しかった方が、こんなに痩せて、ぐったりと、息が通っているか分からない状態になってしまい、心には言いたいことがあるようだったが、一言も言えなかった。皇上（帝）は焦って前後がわからなくなってしまい、御涙を流しながら心をかけて優しくいたわったりしたが、何一つ返事がなかった。眉が緩んで目がうつろで（表情が緩んだ）、憔悴し呆然自失となって、その様子を見たらまたどうすればいいかわからなくなってきた。特別に輦車を呼ぶという宣旨を下したのに（2）、中に戻るとまた（更衣を）動かすことをさせない。ただ「誓いの言葉は、死ぬ時も後れ先立たないと願っていた。あなたもそれを破ってしまってしまわないだろう」と。婦人（更衣）は恐れ多く、途切れ途切りに

「別れる間際になり、息を絶えるぐらい悲し限りである。

悪い運命はどうしようもないが、まだ生きていきたい。

もし早く…これをわかったら…」とおっしゃったきり、もう力がなかった。皇上（帝）はもう一度考えたら、いっそのまま宮中において、せめてどうなるかを見守ろうとも思ったが、外から催促が伝えられてきて、「今日から壇を開け祈祷を始めます、執事などの人たちも揃い、今晚からすぐ行います」というので、嫌々ながら退出させた。それからは皇上は胸が塞がって、少しも休めず

(寝ず)、夜が更けるまで待ってられない。遣わした人が戻ってこないことを、ずっと気にかけていた。使者は着いたとたん泣き声や騒ぎを聞いて、夜半に過ぎたばかりに息が絶えたと言われて、気落ちして戻ってきて上奏した。皇上(帝)は、聞くと悲しく哀悼して、すべてのこともかまわず一人で殿に閉じこもった。皇子も、もともと(帝が)どうしても離したくなかったが、今の時期だと仕方がなく、宮中にいる前例がないので、(皇子が)出るしかない。(皇子は)まだ何もわからない。ただ女房たちがみな慟哭し、皇上(帝)もずっと涙を流し続ける光景を見て、おかしいと思うばかりだ。普通の時でも、悲しくない別れはないので、このような時、悲しみは言うまでもない。

(1) 原文は「御息所」で更衣を呼ぶ。

(2) 宮中の手で運ぶ車で、ただ東宮、親王、大臣、僧正しか乗れない。

錢訳の特徴

1・「輦車の宣旨」の意味について、豊訳では「命左右准备輦车」(周りの人に輦車を用意させたが)となっていた。更衣が勅許を得たのは破格の待遇であることが伝わらないと以前に指摘した。ちなみに林訳では「虽然已经破例的宣示輦车进入禁中接走病人」(前例を破って輦車が宮中に病人を迎えに来ると宣旨したが)となっており、錢訳の「宣旨特传輦车」(わざと輦車を呼ぶ宣旨を下り)と同様の説明的な訳である。

2・「眉が緩んで目がうつろで(表情が緩んだ)、憔悴し茫然自失となり、(その様子を見てまたどうすればいいかわからなくなってきた。」という一節は紫式部の文体に似せて、主語を途中で変えている。「看得(見て)」という表現から帝が更衣を見てという意であることがわかり、主語が更衣から帝に変わったと判断できる。このような書き方は中国語の文法から見れば間違っており、読者に混乱を起しやすいため普通は使わない。しかし、錢氏はあえてこのように訳し、紫式部の描き方を習ったのだろう。この部分豊訳では、「更衣本来是个花容月貌的美人儿，但这时候已经芳容消减，心中百感交集，却无力申述，看看只剩得奄奄一息了。皇上睹此情状，茫然失措，一面啼哭，一面历叙前情，重申盟誓。(更衣はもともと花と月のような美人なのに、いま美貌が削がれ、いろいろな感慨が一気に湧き上がったが、言い出す力がなくて、息が通っているぐらいである。帝はこの場面を見たら、茫然で取みだして、泣きながらこれまでの感情を順々に述べ、契りをもう一度語った。)」となって、文を二つにしている。もう一箇所のような部分がある。錢訳「皇子么，原是怎么也

不肯放开的，无奈这等时分没个在宫之例，就得出去。还不懂得有什么事呢，只看着侍女们个个哭坏，皇上也不断淌着眼泪，直似疑怪，就在平时，离别没有不伤心的，何况此时，悲伤更不用说了。」（皇子も、もともと（帝が）どうしても離したくなかったが、今の時期だと仕方がなく、前例がないので退出させるしかない。（皇子は）まだ何もわからない。ただ女房たちがみな泣き、帝もずっと涙を流す様子を見ておかしいと思うばかりだ。普通でも悲しくない別れはないが、このような時、その悲しみは言うまでもない。）」豊訳では、「小皇子已遭母喪，皇上颇思留他在身边。可是喪服中的皇子留侍御前，古无前例，只得准许他出居外家。小皇子年幼无知，看见众宫女啼啼哭哭，父皇流泪不绝，童心中只觉得奇怪。寻常父母子女别离，已是悲哀之事，何况死别又加生离呢！（小さい皇子が母をなくし、帝は彼をそばにおいておこうとかなり思っているが、喪服中の皇子が御前に仕えるのは古来から前例がないので、更衣の実家に戻らすことをゆるすしかない。皇子は幼くて無知で、女房たちが泣いて、父帝も泣き絶えず場面を見て、童心におかしいと思っただけだ。尋常の親子の別れはもう悲しいことだが、死別に加える別れのほうはなおさらだ。）」となっている。

3・更衣唯一の和歌の解釈についても銭訳は他訳と違いをみせ、原文に忠実である。「（原文）かぎりとして別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり　いとかく思ひたまへましかば」豊訳では面临大限悲长别，留恋残生叹命穷。「この世を去っていくところに、長い離別を嘆き、残る命に名残多いが、その短さを嘆く」「留恋」という言葉から生きるに対して執着を読みとれるが、一方「叹」は嘆くという意味で、「嘆息」「悲嘆」なども同じニュアンスがあり、命がもうすぐ終わりで仕方がない気持ちを読みとれる。「命の短さを嘆く」に訳すと、運命だと諦める感じがする。林訳では「生有涯兮离别多，誓言在耳妾心苦，命不可恃兮将奈何！」（人生は果てが有り、離別が多い。誓いを覚えるが、心が苦しい。命が頼れなくなることは、どうしようもない。））となっており、更衣がひたすら離別を悲嘆するだけで生きるに対する執着を読みとれない。それに対し、銭訳では「临到歧途悲欲絶，不胜薄命恋残生。（別れる間際になり、息を絶えるぐらい悲し限りであり、悪い運命を耐えられなく、まだ生きていきたい）とは命に対する執着と訳す。更衣の唯一の和歌は、たおやかさの中にはげしさと強い芯のある女君であることを示している。生への執着がありながら、叶えることのできなかつた帝の悔恨が光への愛につながる重要な部分である。

4・錢訳では「御心がまどひ」を悲しく哀悼すると帝の気持ちに踏み込んで解釈し「傷悼」と表現している。

(四段)

原文

限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にぼりなむとなきこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕といふ所に、いとかめしうその作法したるに、おはし着きたる心地、いかばかりかはありけむ。母君「むなしき御骸を見る見る、なほおはするものと思ふがいかひなければ、灰になりたまはむを見たてまつりて、今は亡き人とたぶるに思ひなりなん」とさかしうのたまひつれど、車よりも落ちぬべうまろびたまへば、さは思ひつかしと、人々もてわづらひきこゆ。内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命よむなん、悲しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるがあかず口惜しう思さるれば、いま一階の位をだにと贈らせたまふなりけり。これにつけても、憎みたまふ人々多かり。

もの思ひしりたまふは、さま容貌などのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく憎みがたかりしことなど、今ぞ思し出づる。さまあしき御もてなしゆゑこそ、すげなうそねみたまひしか、人柄のあはれに情ありし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とは、かかるをりにやと見えたり。

はかなく日ごろ過ぎて、後のわざなどにもこまかにとぶらはせたまふ。ほど経るままに、せむ方なう悲しう思さるるに、御方々の御宿直なども絶えてしたまはず、ただ涙にひちて明かし暮らさせたまへば、見たてまつる人さへ露けき秋なり。「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。一の宮を見たてまつらせたまふにも、若宮の御恋しさのみ思ほし出でつつ、親しき女房、御乳母などをつかはしつつありさまを聞こしめす。

錢稻孫訳

事有定制，只得按礼殡葬，这当儿，太夫人恸哭着要趁着这缕烟同上西天，赶上送殡宫娥的跟车，来到爱宕地方，庄严营葬，可知道是多么的伤心！话倒说得通达：“徒然看着遗骸，宛然如生，倒不如眼见她化了灰，也死了心，如今是没了的人了”，哭得几乎跌下车去，吓得众人嚷着“原说的呢！”，忙来扶持。大内

里来了钦使。宣读敕旨，追赠三位，又是一阵悲伤。原来皇上深悔：连个女御都没叫称呼得，如今至少也追进的一阶。这也还有人不服的。可是明理的呢，如今倒没个不想起她来，那丰姿的优美，性情的和蔼可亲，没得可以抱怨的。只怪皇上宠待不好，故所以叫人无聊嫉妒。如今连御前的值侍宫娥们之间，都在念道着她的人品儿可敬，心地儿慈祥。所谓“歿后思”（1），正说的是这种样的人情吧。一阵子忙碌过去，接着追荐之事，皇上都一一询问周详。悲怀莫遣，与日俱增，也不曾叫过谁直宿寝殿，朝夕只是落着眼泪，仰见御容的人都感到露浥悲秋。唯有弘徽殿（2）还在抱怨：“人都歿了，还叫人不得舒口气儿，这分儿的偏心呵！”皇上一见到一皇子，就惦念到小皇子，不时差出些近侍宫娥、乳娘之辈，去探问近况。

（1）古歌：在时习昵生憎厌，歿后思量剧恋人。

（2）即右大臣之女，生一皇子的女御，住在弘徽殿。

錢訳の日本語訳

決まった制度があるので、儀式に従い、葬礼を行わなければいけない。この際に、太夫人（北の君）はこの煙に乗って西空（極楽）に行こうと慟哭し、宮娥（女房）たちが葬送する車に乗り込んで、愛宕というところに行ってしまう、荘厳な儀式が行われていて、なんと悲しいことか。話は理性的で、「いたずらにこの亡きがらを見て、まるで生きているように思われて、むしろ灰になってしまうのを見方が諦めることができる。今となっては消えてしまった人だなあ」と言いながら、車から落ちそうになって泣いていた、皆は驚きながらも「やはり」と言いながら、急いで支えに来た。宮中から使者が来た。宣旨を下り、（更衣が）三位に追贈された。（更衣のまわりの人々は）またひとしきり悲しみがこみあげる。実は皇上（帝）が（更衣を）女御とよばせなかったことを深く後悔し、今せめて一階級を上げた。このことに対しても気がすまない人がいる。しかし、道理をわきまえている人たちは、みな彼女の、振舞いが優雅で、氣質が穏やかで親しみやすかったことを思い出していた。ただ皇上（帝）の寵愛がよくなかったせいで、むやみにみなに嫉妬された。今御前に仕える宮娥（女房）たちの間までも、更衣の人柄のよさ、心根のやさしさを懐かしんでいる。「歿後の思い」（1）というのはこんな状況こそだよな。ひとしきり忙しい日々が過ぎて、続いての追悼にも、皇上（帝）は一々ご弔問になる。悲しい気持ちが晴れなくて、日々重くなっていく。誰かも寝殿に宿直させないで、ただ朝夕涙を流していた。ご様子を拝見する人々も露に湿る悲しい秋

だと感じる。弘徽殿（女御）（2）だけは「亡くなったのに、ほっと胸をなでおろそうにもないひいきだこと」と相変わらず文句を言っている。皇上（帝）は一の宮を見るにつけても、小皇子（若宮）のことを恋しく思い出し、周りの宮娥（女房）や乳母などを遣わして、近況をお尋ねになる。

（1）古歌：生きている時はいつも一緒にいるので厭になっていた。亡くなって考え直してみると今になって恋しくなる。

（2）つまり右大臣の娘、一の宮を生んだ女御、弘徽殿に住んでる。

銭訳の特徴

1・「さまあしき御もてなしゆゑこそ」の訳については訳比較すると豊訳では「只因过去皇上对她宠爱太甚、（ただ過去帝は彼女を寵愛しすぎたので）」、林訳では「从前只因皇上过分宠幸、（ただ昔は帝が寵愛しすぎたので）」と更衣の死は読者に女同士の嫉妬と解釈されるのに対し、銭訳だけは「只怪皇上宠待不好、（ただ帝の寵愛がよくないせいで）」と帝の寵愛が悪かったと正しく訳している。更衣の死の原因が、秩序を破った帝に責任があると問題の本質を捉えている。

2・「はかなく日ごろ過ぎて」の部分、銭訳では「ひとしきり忙しい日々」となっており誤訳といえる。その後の「後のわざなどにもこまかに」を忙しくと解釈し「一々ご弔問になる」としたのかもしれない。

3・帝が更衣を失い悲嘆に茫然自失の中、弘徽殿女御が月夜に管弦を催し「角々しき人」と語り手に評される場面。豊訳では「这弘徽殿女御原是个非常顽强冷酷之人（冷酷で頑固な人）」林訳「大家对弘徽殿女御这种幸灾乐祸、旁若无人的态度都很不以为然。不过，她本来就是这种个性倔强的妇人，所以故意要这样做的吧。（女御の人の不幸を喜び、傍若無人な態度に対していいは思わない。しかし、彼女はもともとこんな性格が強情な婦人で、そこでわざとこうやっただろう。）」と悪人として紹介されている。両訳に対し銭訳は、「举动多带棱角的那人，却不把来当会事（その振る舞いが角のある方は大した事と思わない）」と原文どおり頑なな人柄と訳され、読者に不要な予断を与えない。

（五段）

原文

野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、

鞞負命婦といふを遣わす。

夕月夜のをかしきほどに出だし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。

命婦、かしこにまで着きて、門引き入るるよりけはひあはれなり。やもめ住みなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくるひ立てて、めやすきほどにて過ぐしたまひつる、闇にくれて臥ししづみたまへるほどに、草も高くなり、野分にいとど荒れたる心地して、月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。

南面におろして、母君もとみにえものたまはず。「今までとまりはべるがいと憂きを、かかる御使の蓬生の露分け入りたまふにつけても、いと恥づかしうなん」とて、げにえたふまじく泣いたまふ。「参りては、いとど心苦しう、心肝も尽くるやうになん」と典侍の奏したまひしを、もの思うたまへ知らぬ心地にも、げにこそいと忍びがたうはべりけれ」とて、ややためらひて仰せ言伝へきこゆ。

「『しばしは夢かとのみたどられしを、やうやう思ひしづまるにしも、さむべき方なくたへがたきは、いかにすべきわざにかども問ひあはすべき人だになきを、忍びては参りたまひなんや。若宮の、いとおぼつかなく露けき中に過ぐしたまふも心苦しう思さるるを、とく参りたまへ』」など、はかばかしうものたまはせやらずむせかへらせたまひつつ、かつは、人も心弱く見たてまつるらんと、思しつつまぬにしもあらぬ御気色の心苦しさに、うけたまはりもはてめやうにてなんまかではべりぬる」とて御文奉る。

「目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光りにてなん」とて見たまふ。

ほど経ばすこしうちまぎるることもやと待ち過ぐす月日に添へて、いと忍びがたきはわりなきわざになん。いはけなき人をいかにと思ひやりつつ、もろともにはぐくまぬおぼつかなさを。今は、なほ、昔の形見になずらへてものしたまへ。

などこまやかに書かせたまへり。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれとあれど、え見たまひはてず。

「寿さのいとつらう思ひたまへ知らるるに、松の思はむことだに恥づかしう思ひたまへはべれば、ももしきに行きかひはべらむことは、まして、いと憚り多くなん。かしこき仰せ言をたびたびうけたまはりながら、みづからはえなん思ひたまへ立つまじき。若宮は、いかに思ほし知るにか、参りたまはむことをのになん思急ぐめれば、ことわりに悲しう見たてまつりはべるなど、うちうち思ひたまふるさまを奏したまへ。ゆゆしき身にはべれば、かくておはしますも、いまいまいかたじけなくなん」とのたまふ。

宮は大殿籠りにけり。「見たてまつりて、くはしう御ありさまも奏しはべらまほしきを、待ちおはしますらむに、夜更けはべりぬべし」とて急ぐ。

「くれまどふ心の闇もたへがたき片はしをだに、はるくばかりに聞こえまほしうはべるを、私にも心のどかにまかでたまへ。年ごろ、うれしく面だたしきるいでにて立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、かへすがへすつれなき命にもはべるかな。生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、ただ、『この人の宮仕えの本意、かならず遂げさせたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな』と、かへすがへす諫めおかれはべりしかば、はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの遺言を違へじとばかりに出だし立てはべりしを、身にあまるまでの御心ざしのよろづにかたじけなきに、人げなき恥を隠しつつまじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、よこさまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる。これもわりなき心の闇になむ」と言ひもやらずむせかへりたまふほどに夜も更けぬ。

「上もしかなん。『わが御心ながち、あながちに人目おどろくばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契りになん。世にいささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを、ただこの人のゆゑにて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては、かううち棄てられて、心をさめむ方なきに、いとど人わろうかたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ』とうち返しつつ、御しほたれがちにのみおはします」と語りて尽きせず。泣く泣く、「夜いたう更けぬれば、今宵過ぐさず御返り奏せむ」と急ぎ参る。

月は入り方の、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。

鈴虫の声のかぎりを尽くしても長き夜あかずふる涙かな
えも乗りやらず。

「いとどしく虫の音しげい浅茅生に露おきそふる雲の上人
かごと聞こえつべくなんむ」と言はせたまふ。

をかきし御贈物などあるべきをりにもあらねば、ただかの御形見にとて、か
かる用もやとのこしたまへりける御装束一領、御髪上の調度めく物添へたま
ふ。

若き人々、悲しきことはさらにもいはず、内裏わたりを朝夕にならひて、い
とさうしく、上の御ありさまなど思ひ出できこゆれば、とく参りたまはんこと
をそのかしきこゆれど、かくいまいましき身の添ひたてまるらむもいと人聞
きうかるべし、また、見たてまつらでしばしもあらむは、いとうしろめたう思
ひきこえたまひて、すがすがともえ参らせたてまつりたまはぬなりけり。

錢稻孫訳

秋风起了，顿觉寒意侵肤的黄昏时，分心事儿更比白天还多，差了个叫鞞负的命妇（1）的。月色清莹里差的出去，自家便对月坐待。记起了往时这般月夜，弦琴遣兴，她那指下清音，偶尔然的低吟浅唱，都有人皆莫及的别致风韵，面貌宛在眼前，却已幻影（2）之不如了！命妇到得那边，车一进门，便是一派凄凉景象。一向虽说寡居，为了抚育那一个人儿，也点缀得清雅有致的，想今番丧明心昧（3），意绪销沉，草都长高了，秋风里越发显着荒凉，唯有月光不碍蒿莱（4），照入帘栊。南簾下（5）下的车，太夫人乍见说不上话来，半晌，说道：“这条苦命儿还延在人间，却蒙钦使，这般披蒿拂露来临，惶愧无地”，说着竟按抑不住哭出声来。命妇道：“那天典侍（6）回奏：‘每次来到府上，总是伤心得肝肠欲绝的’，这颗不懂事的心里，也着实难过得紧呢”，稍稍迟疑了一下，传达圣旨。“皇上吩咐：‘那一阵儿只当做梦，渐定下来，却禁不住这梦儿竟没个醒的，如何是好，也没个人可以商量得，何妨不声不张的进来走动走动？就是小皇子罢’，凄凄凉凉地只在薤露之中过日子，也是痛心的事，还不如早日送了进来也罢，呜咽着说得话不成句，还生怕人家看得心肠柔弱，不无顾虑似的，神色惨戚，实在忍不到听完吩咐，就匆匆退了出来了”，说着递过宸翰，上面细写着：

“初意渐远或可少纷所思，乃迟之累月而益无以堪，莫如之何。稚者何似，亦所关怀，唯莫由共事鞠是歉，尚其比诸遗念而善视之！”

下面还有歌句：

“宫城原上风声里，
凝露先愁到小荻”。

却没有念完。说道：“正悟到的延年命苦（7），还怕松树相嘲（8）呢，何况出入宫门，一发不胜惶恐了。所以属拜皇言，自己却不敢承命。小皇子么，不知怎底那么聪颖，直催着要进内去，仰见至性，不觉伤感，还请将这番私意，代为奏上，长住这不吉之地，原也不是道理”。命妇打算告辞道：“皇子似已安息，按说应当一见，好详细复奏，可是夜已深了”。太夫人道：“这分迷味心事，正要申诉一二，聊抒襟怀呢，几时不衔使命，请过来多坐一会。年来只喜庆场面才得晤见，此番却为了这样的差使降临，反复想来，好不腆腠！当年一生她，就属意不浅，故了的大纳言直到临终，还反复叮嘱的：‘只是这个入宫本愿，务必达成了。莫要我死之后，就懈了意’！所以明知没了着力依靠是且不容易的，只唯恐违背了遗嘱，勉力打发上去，忝蒙逾分的隆恩，她也不敢不隐忍辛苦，勉事敷衍过来，岂料担受不了人家妒嫉之深，难处的事越多起来，竟是这般结局，沐恩反倒成了苦事。这也是迷昧了心肠的胡言呵！”说着抽咽不已，夜也深了。命妇道：“皇上也常反复这么说呢：‘虽说出自我心，也何苦惊人耳目至于此极？也是不长之兆呵，如今想来，倒是一番冤苦姻缘了！一向不曾委屈人心，就为了她，却招得许多原可不招的人怨，结果似这般见弃于人，回心无术，讨得没趣难堪，也不知前世是什么缘分’！常只是泪如潮涌呢”，说个不完。歔歔了一阵，命妇立起身来：“夜真深了，不待天明，须得复命呢”，匆匆辞出。月色西偏，寒光如浸，轻风扇凉，草丛里一片虫音，似相催促，却令人留恋难去。尚未肯登车，吟了一句：

“铃蛩声竭无边恸，
泣尽长霄泪有余。”
太夫人传出话来（9），
“已繁蛩泣蒿莱下，
看露添从云上人（10）；”

倒还要抱怨一句了”。此时也并不算送礼，不过做个纪念，检了原为这等用处留着的衣装一领，添了点梳妆之具。年轻人们（11）悲伤不用说得，想起了过惯的大内里热闹朝晚，上头的起居情景，一意怱怱早日进去，可是这样个不吉之身陪去呢，人前也不像样，暂时不见呢，又惦得不放心，因此迟迟没有送回宫去。

（1）宫内中级女官叫命妇，负靱是武官之号，大概其父兄或丈夫当着衙门府武官。此人在书中仅此一见。

- (2) 用的歌句：玄夜空迷虚幻影，差强几许梦中真。
- (3) 用的是作者曾祖的名歌句：人间父母心非昧，却为思儿道自迷。心昧一语，成了常言，恰与丧明之痛相似。
- (4) 用句：门庭冷落无人到，蒿莱丛丛不碍春。
- (5) 寝殿建筑正屋南簷的阶前。
- (6) 内侍司的次官，凡寺署都是官分四等：长官，次官只一二人。内侍司长官叫“尚侍”。
- (7) 意思用庄子的“寿则辱”。
- (8) 用寿则辱之意的歌句不少，有一句是：如何犹在人间世，羞被高砂松树嘲。高砂松树是千年神树，常作长寿的象征用。
- (9) 这里“传出话来”是因为太夫人只能送到廊前，没有穿鞋下地，并不是已回屋内。这些地方，须了解到生活方式才不觉奇怪。
- (10) 对宫中人的敬称，这里当然指命妇。
- (11) 小皇子的保姆辈。

錢訳の日本語訳

秋の風が吹いて、急に肌寒さを感じさせる夕暮れの頃、考えることは昼より多くなり、負轂という命婦(1)をお遣わしになる。月の光が清らかな時分に遣わして、ご自身は月に見ながら座って待たれる。昔のこのような月の夜には、興の赴くまま管弦を遊んだものであり、彼女が掻き鳴らした清らかな音も、たまにふと漏らした言葉も、他人と比べられない特別なものごしである。様子はまるで目の前に現れるようだが、幻影(2)には比べられないほどである。命婦がそっちに到着すると、車が門に入るなり、いたわしい光景がすぐ見えた。昔からやもめ暮らしであるけれども、あの方を育てるために、まだきれいに飾り付けていたが、今回光を失い気がぬけて(3)、気持ちが落ち込んでいて、草も高く茂り、秋の風にひとしお荒れて寂しい感じになる。ただ月光は雑草を邪魔だと思わなくて(4)、簾の中に照らして、入り込んでいた。(命婦が)南簾(5)から下りて、太夫人(北の方)はすぐにはものを言えず。少し経つと、「不運な命はまだこの世に生き長らえておりますが、ご使者が蓬を避け露を分けていらっしゃるに付けても、まことに恥ずかしい限りです」と言いながら、こらえきれぬように泣き出した。命婦は「先日、典侍(6)が『お家に訪ねるに付けても、いつも腸も断つようで』と上奏して、この物の興趣をわきまえない心にも、いかにも耐えがたくてたまらないです」と

言って、少したってから、宣旨をお伝え申し上げた。「皇上（帝）は『あの頃は夢だと思っていたが、次第に落ち着いてみるとこの夢が尽きないのが堪えがたくて、どうすればいいかを問い合わせる人さへいないので、内々で宮中に参られないものか。ただ小皇子（若宮）は、いたわしく露の中に暮らしておいでになるのも心を痛める事であるのでむしろ早く入内させたら』とすすり泣いて、話しもときれどきれである、それでも、心が柔らかくて弱いと思われようかと、気兼ねするようで、御気色も凄然で、仰せ言を終わりまで待てずに、退出してまいりました」と言って、御手紙を渡し、（次のように）細かく書いてある：

「時間がたてば紛れることが少なくなるかもしれないが、実は時間が積もっていけばいくほど、堪えられなくなり、どうにもならない。幼い宮をどうすればいいかも、思案して、ただ一緒に育てられないのが申し訳ないと思いますが、なおあの人（小皇子）の形見として良く世話してください」

下には歌がある

「宮城の原で、風の吹く音の中に、

凝らした露がまず心配するのは小萩である」

読み終わらないが。「生き延びるのは苦しい（7）ことだと悟るところだが、松に嘲笑される（8）のを恐れているのに、まして宮中に進出するのは、一層恐れをなします。そのため御言葉をいただいているのに、自分が命を承ることができません。小皇子（若宮）も、驚くほど賢いためか入内を催促するばかりで、（子として）極めて真実の感情を拝見して、感傷的になり、この私情を申し上げていただけてください、（私のような）この不吉な所に長く過ごすのもともと道理ではないと思います」と話した。命婦はいとまごいをするつもりで、「皇子（宮）はもう寝たようで、もともとと来て詳しく上奏するはずでしたが、夜が更けたので」と言った。太夫人（北の方）はこうおっしゃっていて、「くれまどう気持を、晴らそうと思っているところで、いつか仕事がないとき、こちらにお寄りになってください。年頃お祝のため会いにいらしたが、今回こんな使命で来ていただいことはよく考えたら、全く恥ずかしいことです。当時娘が生まれたとたん、期待していたため、亡くなった大納言の臨終の際の「此の娘を入内させる願望だけは必ず叶えてほしい。私が死んでも気落ちしないでください！」ということは何度も繰り返して私に聞かせたのです。そのため、力がある頼りがなくては（入内は）きっと辛いと分かっていた

が、遺言を逆らってはいけないと思い、気のすすまぬ思いで入内させました。

(帝の) 過分の寵愛を受けて、彼女も(人として扱われない) 苦しみやつらさを我慢しなければいけなくて、無理やりななとかつきあいをしてあしらっていましたが、他の人たちの積み重なった嫉妬が耐えられなくて、つきあいにいくことが増え、最後こういう結末になってしまい、恩寵を受けることはかえって苦しいことになってしまった。あーこれもたわごとでございます」と言いながらすすり泣いた。夜も更けた。命婦は「皇上(帝)も何度もこうおっしゃいまして、『わが心から(の愛)だけど、なぜわざわざ極めて人目を驚かしたのだろう。これも長く続けられない兆しだったのだ、今振り返ると、むしろ苦しい因縁だった! これまで人の心を損なったことがないが、彼女のために、もともと受けなくてもいい人の恨みを招いて、あとに残されて人々に見捨てられ、心を落ち着けることも出来ず、決まりが悪くなってしまう、あー前世はいったいどんな縁だったんだろう!』と、いつも波のように涙が湧いていらっします」と言い続けた。ひとしきり嘆いた後、命婦は立ち上がり、「夜はほんとに更けたので、夜明けまで待たず、帰って上奏しなければいけませんわ」と、急いで退出した。月は西に傾き、澄んだ光は照り映えて、柔らかい風が涼しく、草むらの虫の声々が催促のようだが、人は離れがたい。まだ車に乗る気になれない。一つの歌を詠んだ。

「鈴虫が声のかぎりまで鳴いて、悲しくてたまらない、

長い夜を鳴き尽き、涙が余る」

太夫人(北の方)から伝言(9)が伝わってきて

「甚だしい虫が泣く浅茅の下、

露が雲の上人(10)に添えることをみる」

少し文句を言いたくなかったが」。この時、贈り物とは言えないが、記念として、もともとこのために用意した衣服一そろいを捨て、髪をくしけずる用具も添えた。若い人々(11)の悲しさはもちろん、内裏に暮らし慣れた賑やかな朝夕、上の暮らす光景を思い出すと、早く参内させようとお勧め申し上げているけれども、(北の方は)不吉な身がお付き添い申すのも、世間体も悪かろうし、暫く会わないのも、気がかりで安心できないから、すぐ参内させることはできなかった。

(1) 宮内の中級女官は命婦という、負頼は武官の号であり、多分父兄、また夫は衛門府の武官を務めていた。この人は本書の中にここにしか出てな

い。

- (2) 使った歌：「暗い夜の空しくて儂い幻影は、真実のような夢（夢の中の真実）にくらべてそれほどまさってはいなかった。」
- (3) 使ったのは作者の曾祖父の名句：「この世の親は心が迷わないのに、子供を思う～迷う」。「心味」という言葉は、熟語になり、「失明の痛」と似ている。
- (4) 使った歌：「門前は寂れていて、訪れる人もいないが、よく茂る蓬は、春の訪れを邪魔しなかった。」
- (5) 寝殿造りの正邸の南簾の階段の前
- (6) 内侍司の次官、寺署の官員は四等に分け、長官、次官は一人、二人しかいない。内侍司長官は尚侍というのである。
- (7) 意味は荘子の「寿則辱」を使った。
- (8) 「寿則辱」を使った和歌は少なくない。中にはこういう一句がある。「なぜまだこの世にいるか。恥ずかしくて高砂松に嘲笑われる」。高砂松は千年の神樹で、よく長寿の象徴として用いられる。
- (9) ここの「伝言が伝わってきて」というのは北の方が廊下の前にしかみおくることができないため、靴をはいてなくて地面に立たなかった。邸の中に入ったわけではない。このような所に対して、生活のスタイルを分らないとおかしく思う。
- (10) 宮中の人に対する敬称である。ここはもちろん命婦のことを指している。
- (11) 皇子の乳母たち。

錢訳の特徴

1・本来なら「靱負」命婦なのだが、錢氏は中国語の語順に従ってあえて語順を変えた可能性が考えられる。

2・原文の引き歌は『古今集』の「ぬばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」であり闇の現実のはっきりした夢に及ばないという内容である。原文では引き歌と逆に「面影につと添ひて思さるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。」と闇の現の方がまさると述べている。錢訳は、引き歌を踏まえて解釈したといえるだろう。

錢氏は、生前の様子を思い出した更衣の姿は、今みている幻よりもすばらしいといっている。幻で更衣を見られても、思いだされる生きていた更衣の姿（当

時の本当の更衣)、様子の方がはるかにすばらしいと述べている。(豊訳は思い出した姿(幻影、思いだしていることが真実ではすでなく、思いだすこと自体が幻影と解釈)は生身の姿に劣るといっている。) 銭訳は引き歌の解釈も「暗い夜の空しくて儂い幻影は、真実のような夢(夢の中の真実)にくらべてそれほどまさってはいなかった。」と同じで、豊訳では「然而幻影即使浓重,也抵不过一瞬间的现实呀! (しかし、幻影はどんなに濃くて強くて、一瞬の現実にも比べられない!)」と引き歌と合致し、林訳では「却真个是所谓「闇中相契約, 怎得梦里见」, 终究飘渺而不可把握了。(まるで「闇の中に契りを結び、どうすれば夢の中にあえるだろうか」ということのように、やはり儂くてつかまえないことである)とまったく別な内容になっている。

3・「月影ばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。」の表現は、更衣を亡くした後、訪れる人がいない荒涼とした更衣の実家の風景。これは更衣の母の心象荒涼とした心象風景だが、月を擬人化した日本的な表現である。この部分、豊訳では「只有一轮秋月, 繁茂的杂草也遮它不住, 还是明朗地照着。(ただ一輪の月、生き茂る雑草に覆い隠されなくて、明るくて照らしている。)」林訳では「如今月光依然照射其上, 倍增无限凄凉。(今月光是依然としてその上に照らしているが、限らない寂しさが増した。)」と明るい月とのコントラストとして今の淋しさを強調する。銭訳だけが「唯有月光不碍蒿莱, 照入帘拢。(ただ月光是雑草を邪魔だと思わなくて、簾の中に照らして、入り込んだ。)原文どおり月光だけが邸に射し込むと訳す。

4「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ」帝が母を亡くし更衣の実家にいる光に父としての思いを寄せる歌。豊訳：冷露凄风夜, 深宮泪满襟。遥怜荒渚上, 小草太孤零。(冷たい露と淋しい風の夜、深い宮中に涙が襟を濡らす。 遥かな渚の上に、小さい草は非常に淋しい。) 豊訳は小萩を小さい草に翻訳し光を喩えている。林訳：秋风起兮露华深, 宫城野外多幼萩, 安得稚儿兮慰朕心。(秋風が吹き始め露が深し。宮城野の外に幼い萩が多い。どうすれば幼い子を得て私の心を慰められるのであろうか。) 林訳は光への心配よりも帝自身が光を手に入れたいとかなりの意識をしている。銭訳：宮城原上风声里, 凝露先愁到小萩。(宮城の原で、風の吹く音の中に、凝らした露がまず心配するのは小萩である。) 豊訳も小草(小萩)を光に喩え淋しいと読み上の句に帝の涙を訳しているが、銭訳は露(帝)が小萩(光)を心配するという関係性までもが訳されている。銭訳は出来る限り原

文どおりに訳していることが明らかである。

以上、「桐壺」巻前半部分の錢訳の紹介と分析をした。全体を通してのまとめは次号で行う予定である。最後に錢氏自身による訳本『源氏物語』につけられた序文を紹介する。

源氏物語（选译）

[日本] 紫式部

“源氏物語”五十四帖，是日本最古最大部的也是全世界最早的长篇小说。完成在平安时代的中期——藤原氏时期，公元十一世纪初头，当我北宋真宗之世。书中描写一个才貌双绝的风流公子“光源氏”和他周围许多女性的种种悲欢离合。起笔于其诞生之先，一直写到他身后的余情，事历四朝七十多年，登场人物多至四百四十来人。用当时的典雅口语，细说当年宫廷贵族的生活和情绪，透露着那时代争夺政权的情况，随处还点出一些作者对人生的批评和理想。缠绵细腻的语调，代表着日本语言的温柔优美，而参插离奇的布局，又启发了后代小说的笔路。不仅是平安文学中的白眉，其实是整个日本文学的一大代表作品。万叶是和歌（韵文）的源泉，这源氏是物语（散文）的型范。

作者是个女子，以文学入侍中宫彰子，宫中的通称叫“紫式部”。出身于世代书香的儒素人家，父亲藤原为时，官式部丞，夫君藤原宣孝也是个式部丞，所以宫称原叫藤式部。自从写的这物语中一女脚色“若紫”特别传名于当时，于是进行了这不朽之名。本名和生卒年月都无确考，但凭流传有她半年光景一段时期的随笔日记和其他歌集里散见的作品，约摸揣测其生年。从小就极其聪颖，十岁那年，长兄读史记背不上来，她却耳熟得出口如流，她父亲叹道可惜不是个男孩。二十二岁才和宣孝结婚，生有一女，二十四岁就寡居了。这部物语大概就在她二十七八岁时开始写的，当时已经传名了，也是其所以见召于中宫的原因，她日记有给中宫讲白氏文集中乐府的记载，二十九岁的腊底就的宫职，一直还是继续写作这物语，到一条天皇驾崩，中宫移殿之后，三条天皇的长和三年（1014）方完成的。那时大概已经衰病了，不一二年就故世在父亲任地的越前国，享年可能三十八九岁。

中宫彰子是当代摄政关白藤原道长之女，十二岁便以女御入侍，十三岁册立为中宫。中宫原有道长的长兄前关白道隆之女定子，此时创辟了两宫并立的新例。外政权势，到道长而造乎其极，他晚年有咏望月的和歌，活写出其得志面貌。译

其句意：

望月无亏圆满月

将天直作自家天。

外戚争权的手段是嗾使入宫的女儿争宠，而后妃争宠的法门是罗致才女做侍从以风流文雅相竞。定子的侍从才女有“清少纳言”，就是随笔文学祖师的“枕草子”作者；彰子的侍从才女就是这物语文学的大成祖师紫式部。平安时代是日本消化了中国文化而创成日本自家文化的黄金时期，于是文学方面，由于平假名的流行，得以自由写出当前的白话，展开了这样随笔文学和物语文学的两大散文学主流，影响直至于今。而这为之基础工具的平假名，当时称为“女文字”，也是宫中女子发展出来的。所以说日本文学完全是首创于女子之手的，确非夸妄之谈，并且也是别国罕见的异事。

这部物语，在紫式部日记里已经看得出当时宫闱，乃至清华闺阁之间，有着不少传钞本了。便是中等人家的女子，也颇有爱读的，例如“更级日记”的作者。其所以脱稿便传之故，不仅是因其笔墨优雅，也由于书中不少闇世和问学修养之谈，尤其在和歌、以及消息文的写作上，对于女性有着相当的教育意义。直至江户时代（德川氏幕政时代，当我明清）士族大户嫁女，都还要在妆奁里放进一部写本；行家所谓“嫁入本”，现在还有发现的。平安后期以下，和歌作家几乎无人不读，物语作家尤无不受其启发与影响。室町时代（当我明朝）的谣曲狂言，德川时代的章回小说以至草子画本，歌舞伎脚本，取材于此书的也着实不在少数。不过已隔千来年的古文，社会和语言的变迁都很大，除却少数歌人文士，优闲闺秀，一般人大多只是口道其名，真正是读全书的很少了。更有一班迂儒，以其描写恋爱，禁止小儿女阅读，正如我们老一辈不让子女看“西厢”一样见解。到最近三四十年来，许多文学研究家认识到此书在文学史上乃至世界文学史上的地位，才极力提倡，讲读成为风气。现在用今语讲译全文之作很多，如与谢野晶子、金子元臣、吉泽义则、窪田空穗、佐成谦太郎诸氏，都出有全书的对译，并加注译释。而谷崎润一郎氏两次语译全书，极意传有原文的语调和风格，似比与谢野晶子的两次语译又进一步。至于集成千年来的考证校异，研究流传的证迹，版本的统系，本文的语法，莫精于最近作古的池田龟鑑氏“源氏物语大成”；评论、赏鉴，则莫过于岛津久基氏的“对译源氏物语讲话”，所惜讲话未竟全书。还有英国人Arther Watney氏的英译也是极有名的。我国曾有提及其名的介绍，如谢六逸，夏巧尊氏，而至今尚未有大规模的翻译。

现在先将“桐壶”一贴译出，以饗读者。 (译者)

日本語訳

「源氏物語」五十四巻は、日本の最も古くて最も大きくて、また全世界では最も早い長編小説である。平安時代の中期——藤原氏時期、西暦十一世紀の初めの頃、ちょうど我が国の北宋真宗の世代に完成した。中には才能と美貌も兼ねる風流な男子「光源氏」と彼の周りのたくさんの女性達との悲しみ、喜び、分かれと出会いを描いていた。誕生の時から始め、死んだ後の余情まで書き続け、四朝七十余年を渡り、登場人物は四百四十余人もあった。当時の雅な口語を用い、当時の宮廷貴族の生活と情緒を細かく語り、当時の政権争いの状況を表している。所々作者が人生に対する批評や理想が見える。優しくて細かい口調は日本語の優しさと美しさを表し、不思議な組み立ては、後の小説の発展を啓発した。平安文学の白眉だけではなくて、すべての日本文学の中にも一大代表作品である。万葉は和歌（韻文）のみならずであり、この源氏は物語（散文）の模範である。

作者は女子であり、文学によって中宮彰子を仕えるようになり、宮中には「紫式部」と通称されていた。世代知識人の家の出身で、父は藤原為時で、官式部丞であった。夫の藤原宣孝も式部丞であるので、もともと「藤式部」と宮中に呼ばれている。この物語に書いた若紫という女役が当時には流行になってから、この不朽の名が通用されてきた。本名と生年月日も確かめられないが、彼女の半年間の生活を記した日記と、他の歌集に散見する作品によっておおざっぱに彼女の遍歴を推測できる。小さい頃から極めて賢くて、十歳の時、長兄が史書を読み、覚えられなかったが、彼女は熟練ですぐ口から出せるぐらいだった。父に男ではないのは残念だと嘆かれた。二十二歳に宣孝と結婚して、女の子を一人産み、二十四歳以降はもうやもめの暮らしをした。この物語は多分彼女が二十七、二十八歳ぐらいの時から書き始め、当時もう有名になり、そこで中宮と呼ばれたのである。彼女の日記の中に中宮に白氏文集の楽府を教えた記録があった。二十九歳の旧暦の12月の末、宮仕を始めても、この物語をずっと書き続けた。一条天皇崩崩し、中宮が宮殿を変えた後、三条天皇の長和三年（1014）まで完成した。その時は多分病弱で、後一年、二年ぐらい父の任地である越前の国でなくなった。享年は多分三十八、三十九歳であった。

中宮彰子は当時の摂政関白である藤原道長の娘で、十二歳で女御になり、十三歳に中宮になった。中宮はもともと道長の兄の前関白道隆の娘の定子であったが、この時から二人の中宮が並立の新例を切り開いた。外戚政治は道

長によって頂点に到達し、晩年は望月の和歌を詠み、彼の姿をまるごと反映した。意味を翻訳する。

「虧が無い月を見、円満な月である。

この天を直ちに自家の天にする。」

外戚が権力を争う手段は入内した娘を帝の寵愛を競い合わせることである。彼らの寵愛を手に入れるコツは才能がある女性を集め、女房にして、風雅で競う。定子に仕える才能がある女房は清少納言であり、随筆文学の親である「枕草子」の作者でもある。彰子に仕える才能がある女房はこの物語文学の大成の親である紫式部である。平安時代は日本が中国の文化を消化して、日本なりの文化を作った黄金時期であった。文学の面では、平仮名の流行で、自由に当時の口語で書けるようになったので、随筆文学と物語文学という兩大散文学の主流は発展して、今にも影響し続けている。この基礎である仮名文字は当時に女文字と呼ばれ、宮中の女子が発展したものである。そのため、日本文学は完全に女に作られたと言っても、大げさな話ではない。これも他国では珍しい異なることである。

この物語は、当時の宮廷から貴族までの間でも、伝抄本が少なくないことは紫式部日記から分かる。中等の家の娘さんにも、愛読する人がいて、例えば「更級日記」の作者である。脱稿となった後すぐ伝抄されるゆえは、文章が流麗で雅であるほかに、世間に対する理解や学問などの教養の話もあるので、特に和歌と消息文の創作において、女性に相当な教育意義を与えた。江戸時代に到って（徳川氏幕府時代、我が国の明清時代）、士族の名門の娘がお嫁になる時にも、化粧箱の中に写本を入れる。学者に「嫁入本」と呼ばれるもので、今でも発見されている。平安後期以降、和歌の作家たちはこの本を読まない人がいない。物語の作家たちもみな影響を受けている。室町時代（我が国の明）の謡曲狂言、徳川時代の章回小説やお伽草紙の絵本、歌舞伎の脚本までもこの本から取材したものが少なくない。しかし、千年が隔たる古文であるから、社会と言語の変遷も大きくて、少人数の歌人、知識人、お嬢様の以外、皆は大体名前だけ分かって、本当に全書を読んだ人が非常に少なくなっていた。さらに陳腐な知識人の連中たちは恋愛の描写があるため、若者に読ませないこともあった。うちの国で年を取った人たちが息子や娘に「西廂」読ませないことと同じ考え方であった。最近の三四十年、たくさんの文学研究家はこの本が文学史、さらに世界文学史の地位を意識し始め、極力勧めて、講読が風潮となった。現

在は現代語で全文を講訳する作品がたくさんある。例えば与謝野晶子、金子元臣、青澤義則、窪田空穂、佐成謙太郎諸氏など、みな全書の対訳を出して、注釈も加えた。谷崎純一郎氏は全書を二回語訳して、原文の語調と風格を極力保って伝えて、与謝野晶子の二回の語訳よりさらに進んだようだ。そして、千年以来の古い考証を集め校正して、伝わってきた証跡を研究し、版本の系統と本文の文法からいうと、一番詳しいのはなくなった池田亀鑑氏の源氏物語大成である。評論、鑑賞の方は烏津久基氏の「対訳源氏物語講談」が一番いいが、惜しいことは全書が完成されていない。また、イギリス人のArther Waley氏の英訳も非常に有名である。我が国では本の名前を紹介したことがあるが、例えば謝六逸、夏明尊氏である。今までまだ大規模の翻訳はなかった。

今は「桐壺」の一卷を訳し出し、読者を満足させる。

追記；本稿は2012年度札幌大学研究助成金によるものである。

注

- * 1 90年代の後半から完訳の中国語訳『源氏物語』は十三種類があるが、誤訳、潤色訳や盗作など様々な問題が指摘されている。中国内陸の訳者によるものがほとんどなので、台湾の林文月訳ではなくほぼ豊子愷訳の影響を受けている。豊氏訳に比べると、黄峰華氏、夏元清氏、康景成氏による訳はたまに言葉の言い換えや文章の削りがあるが、全体的に類似している。(小田切文洋「中国語訳『源氏物語』のその訳文について(1)」(日本大学国際関係学部研究年報30))曹芳氏の訳は完全に鄭民欽氏と同じで、宋瑞芬氏の訳は殷志俊と同じものである。以上の五種類の訳は序文や後記もなく翻訳の経緯を明かしていないので盗作だと思われる。殷志俊氏、鄭民欽氏、姚継中氏の訳は翻訳の経緯について序文があるが訳の底本と参考書物についてはっきり書かれていない。殷志俊氏による訳は豊氏訳の潤色によって作られまた盗作だと指摘されていた(張龍妹「中国における源氏物語の翻訳と研究－翻訳テキストによる研究の可能性－」『海外における源氏物語の世界－翻訳と研究－』(国際日本文学研究報告集三2004年6月 風間書房))。小田切氏の紹介を要約すると、笹生美貴子氏が殷志俊訳は豊氏訳の文言文・白話文の中を取る口調の訳文より分かりやすい現代的な文体にリメイクして「訳者序」に

「豊氏訳を参考した」や「源氏物語の小説性をできるだけ強調する」などを断っているのが、盗作問題ではなくて言語運用を分析するコースを研究対象とする言語学研究の分野においては十分価値のある資料であると指摘されているということである。姚継中訳は殷志俊訳と類似する所があると小田切文洋氏に指摘されまた誤訳も散見できる。鄭民欽氏の訳は序文に二年をかけて訳したと書いてあって豊氏訳と比べると訳文も違うし豊氏より注釈はさらに詳しいが訳文の順序が豊氏訳に似ておりその訳から読みとれる源氏物語に対する理解もほぼ豊氏と同である。梁春氏と王烜氏の訳には翻訳の経緯について何も書かれていない。張龍妹氏は梁春訳の中に手紙文や和歌の翻訳がほとんど殷志俊訳と一致しているから殷志俊訳をもとに作られたものだとして指摘した。王烜訳は2010年に出た最新訳であるが、注釈もなく誤訳も散見できる。(中国語訳の分析に関しては鄭氏によった。)

- * 2 最初に正式的に出版したのは台湾の林文月氏訳である。林氏は台湾大学外文系の『中外文学』の1973年4月号に論文を発表し、その後「桐壺」の試訳を相次いで行い、連載を始め約5年半をかけて1978年12月に完結させた。訳本も同月に出版されその後も再版し続け中国語訳「源氏物語」として広く読まれている。豊氏訳より遅れるが豊氏の出版する前に訳を完成したので豊氏訳の影響を受けていない。
- * 3 拙稿 豊子愷訳『源氏物語』の問題点について－「桐壺卷」における林文月、銭稻孫訳との比較『東アジア比較文化研究』第11号（2012年6月 東アジア比較文化国際会議日本支部）参照。
- * 4 * 1の張龍妹氏論文。
- * 5 * 1の小田切文洋氏論文。および、注3の拙稿の注参照。
- * 6 銭訳本文は、雑誌「訳文」（人民文學出版社）の1957年8月号から転載。
- * 7 * 1の張龍妹氏論文。
- * 8 * 1の張龍妹氏論文。
- * 9 * 3拙論。
- * 10 * 3拙論。